

平成8年5月7日  
千種ロータリークラブにて講演

1960年代に「環境」という語が一般日常に使われるようになったが、この時代ではこの言葉は主として汚染、天然資源の減少、人口過剰、生態系の危機となる、いくつかの事故例を意味した。

アメリカで1800年代末にはじまった草の根グループによる資源保護、生態系保護の民間活動は、1970年4月の第1回地球の日（アースデー）を機に政府機関の一体となって行動が行われるようになった。そして1971年には、アメリカにEPA（環境保護局）、日本に環境庁が出来た。

1990年より前は、自分の身の回りの環境を、人間が望むように人間を中心として健康に良い状態や、生態系に良い状態を作り、それを作り出す資源を確保することが、環境に対する考え方であった。

1990年以降は、人間が行ったこれまでの人工的な自然環境の変形により、地球という生命の存続が、非常な危機になったことに対する問題として意識されている。

あらゆる問題は、人口の増大と、それを支え続けなければならないことから起因している。1800年に10億程度だった人口が、今や58億から60億、そして2000年の中頃には100億に達するという。このような変化の中で、今我々が緊急に考え、そして解決しなければならない地球の近い将来に対する4つの大きな問題は

- ①地球温暖化に伴う地球気候変化
- ②成層圏のオゾン層の枯渇
- ③動植物生息地の破壊と変更（熱帯雨林と湿原の減少）
- ④種族の絶滅

といわれている。

地球温暖化解決の主役は炭酸ガスの減少であり、開発国では自動車をはじめとする輸送の効率化、生産での技術改善であり、そして現在20億の人達が木材を燃料としている開発途上国での代替案が考えられなければならない。

温暖化の2番目の主役であるフロンガスは、同時にオゾンを食いつくす悪役であるので、生物の生存を紫外線から保護しているオゾン層を残すためには、クーラーの冷媒ガスや、溶剤、消火剤、発泡スチロールの禁止に至っている。

1万年前に62億ヘクタールといわれた森は、今15億ヘクタールに減少しており、2、3世紀前にはアメリカの面積の5倍あった赤道のグリーンベルトは今や40%にすぎない。森林の開拓は必要耕地の拡大や、燃料としての消費の必然性の他に、工業製品化での影響を考えあわせて慎重でなければならない。

その熱帯雨林の中に存在する数知れない生物の種のどれかが次の世代に生き残るといわれる中で、種族を絶滅させることは生物の進化の可能性を次々に奪っていつている。

この4つの問題を解決するために民間企業は毎年環境レポートを発行して、企業の環境保護への姿勢を明らかに、又環境団体はそれぞれのテーマ毎の活動を通じて、多くの人達に実情を知らせている。